

静寂の先へ ～赤松林太郎「utopia」に寄せて

無垢な静寂は、時に強烈に香り、時に雄弁に歌う。

夏の夜の鋭利な静けさの上に、レコードの針を落とすように、赤松のウトピアをそっと乗せる。しばらくして沈黙の闇から滴り落ちる、クーブランの青時雨。どこまでも純な音の結晶に息を飲み、思わず目を閉じる。瞼の向こうに広がる百合の廻廊は、幻想の螺旋を描き、奥へ奥へと続いてゆく。神秘という名の幸福な旋回は、おとぎ話の優美なコーカス・レース。

幕間。ここではないどこかから、慕情のララバイが聞こえてくる。ゆりかごの赤子は、微笑をたたえる。笑みとは、花が咲くこと。硬いつぼみが、音に溶けて淡くほころぶこと。愛しいキャロルもまた、ブゾーニが編んだ薔薇の冠を戴いて、音は濃く祈り、響きは花を待ち望む。

アルバムの掉尾、静けさはおもむろに星になり、孤独はやがて歌の海に浸る。アダージェットが消えゆくしじまの先で、まどろみからゆっくりと覚めてゆく私の傍らに、ひとひらの歌がそっと置かれた。

— 花に染む 心のいかで残りけん 捨て果ててきと思ふわが身に (西行) —

花と音。神が私たちに与えた、ふたつの秘蹟。赤松の差し出すころづくしのパスポートを携えた 24 分の旅。静寂の、先へ。

(2020 年 6 月 加藤哲礼)